

# 「いじめ自死事件をもう起こさせない あいち民研からの提言」(概要)

2022年12月1日 発表

## 【はじめに】今回の提言の特徴

- ・いじめ防止のためにこれだけは知っていてほしい、実行してほしいというポイントに絞って提言。
- ・多くの事案で、いじめ認識に問題があることが指摘されており、今日のいじめの特徴の把握に努めた。
- ・いじめ防止のための教育条件整備の必要性、いじめをなくすための社会全体の取組の必要を強調。

## 【I 今日はいじめの特徴は—正しいいじめ認識を】

- ・いじめは相手を支配してあやつる行為なので、単発の「嫌がらせ・悪口」「無視」によっても、やられた側は傷つく。特にコロナ禍で、感情の交流をふくむコミュニケーションが激減してからは、注意が必要だ。以前のような「集団が、弱いものに一方的に、継続して攻撃を加える」ものだけを「いじめ」と認定するやり方では、最近の、相手の不意を突く、単発でいきなり型はいじめ(ハラスメント的なもの)を見逃してしまう。その結果、被害の子どもが追い詰められてしまう。
- ・いじめられた子どもは、そのショックで、教師にも親にも被害を言い出せない。その不安でつらい状態を受け止める人(つらさ・悩みを聴く他者)が現れなければ、一人で抱え込む。その苦痛から「いじめた子どもがいる教室に行きたくない」と訴える場合には、親としては学校を休ませることもやむを得ない。安全確保が第一である。
- ・いじめる子どもには、いじている自覚が薄い場合もあるが、その子自身がプレッシャーや優位に立てない悔しさ、ストレスなどをかかえている場合が殆どだから、そのマイナス要因や自己イメージをなくす(減らす)ことも、学校でのいじめをなくす契機になる。
- ・何かにつけて「他者と比較し、競争の勝者や上位にあるものが人間としても価値が高い」「弱いものは排除されて当たり前」といった差別観念を子どもにもたせる大人の作用(一部のTV番組なども含む)が、いじめ問題の根っこにある。この縛りから子どもたちを(大人自身も)解放する子育て・教育に大人が共同で取り組むならば、いじめは防止できる。

## 【II いじめを生まない、減らすポイント—学校・教師への提案】

- ・教師が規範的な子ども像を示すと、子どもたちは基準に合わない子どもを排除することを学ぶ。模範や基準からではなく、一人ひとりの子どもの願いや困り感から学級づくりや授業づくりを組み立てていくことが必要。

・子どもたちがお互いのことを深く知らないために、安易にいじめたり、他者に恐怖を感じて睨まれたのではなどと感じたりすることも増えている。まずは、教師が子どもの言動に興味を持つこと、その姿勢を子どもと共有し、子ども相互の理解を深めること。

・現代日本のメディア文化には、「死ぬ」という発言、恥をかかせて笑いものにするなど、他者の尊厳を蹂躪する言動があふれている。教師は、それらを日常として見過ごさず、丁寧に指導していくこと。

・様々な押し付けでストレスフルになっている学校を、子どもが自分で発見・創造することの楽しさを味わえる場に変えていくこと。

・教師や保護者など大人が一方的に決めず、子どもに聴きながら、試行錯誤も含めて、子どもが自分で考え、自分たちで決める力を励ましていくこと。

## 【III いじめをなくすために学校に人とゆとりを—教育行政への要望】

・いじめをなくすためには学校全体で取り組む必要があること、校内研修を充実させること。

・いじめを発見するためには、教師にゆとりがあることが必要で、現在よりも多くの教職員、専門職員を教育行政の責任で配置すること。

## 【IV 子どもが大切にされる社会の実現を】

・「いじめ」は学校教育現場で起きている問題であると同時に、大人社会においても起こっている事象の影響が子ども社会にも投影されてしまっているもの。

・そこで、社会全体の問題として「いじめ」を生むような風土の解消を目的としなければならない。

・「いじめ」は子どもが抱える学校や地域、社会全体にかかわるフラストレーションからも起こっている。そのためにも、戦争を含むあらゆる暴力の排除、多様性の尊重、人間を豊かにする文化への参加、子どもの意見が尊重される学校・社会、様々な悩みや要求実現の願いに応える相談機関の増設が必要。



(全文はあいち民研のウェブサイトに掲載されています)